

## 令和四年の新年にあたって

長島愛生園長 山本典良

あけましておめでとうございます。

昨年と同様に、新型コロナウイルス感染症で始まり、未だ収束はしていませんが新型コロナウイルス感染症で終わった年で、従来株による第三波（一昨年一月中旬から二月下旬）、感染力が従来株の二・三倍（国立感染症研究所による）のアルファ株による第四波（三月下旬から六月中旬）、そして感染力がアルファ株の二・五倍のデルタ株による第五波（七月上旬から九月下旬）に引き続き、年末からのオミクロン株による第六

波をどの程度の波高で迎えるかで始まり、新型コロナウイルス感染症に一喜一憂しつつも、ウィズコロナ時代に向けての一年となりそうです。

昨年は、愛生園でもコロナ禍で自粛の一年でしたが、自粛と入所者のQOL（quality of life）尊重との狭間で、感染リスクを最小限としつつQOL重視の最低レベルの制限で、感染をかわすことができたと考えています。愛生園でも年初には、希望者にワクチンの三回目の追加接種が始まる予定です。

そして、我が国特有の同調圧力がコロナ禍の収束に寄与しているのは事実ではありますが、行き過ぎた同調圧力には留意したいと考えています。

さて、入所者数は一年前の二二九名が、昨年末には一一八名で、平均年齢が八七・九歳（一般舎三六名で平均年齢八二・五歳、病棟とセンター介護棟八二名で平均年齢九〇・二歳）となり令和四年を迎えています。喫緊の課題としては、令和二年からの大きな転換期となる、政府の第一四次国家公務員定員合理化（削減）計画と入所者生活援助の充実との両立が挙げられます。実際に一昨年からは愛生園でも看護師の定員が削減されていますが、看護師および介護員各職員がプロフェッショナルとしてプライドを持って勤務し、職員一同が看護師定員減をカバーしあい、看護介護において現状の質を保ち、センター介護棟での看取りや訪問看護介護でできるだけ現状での生活を維持する。継続が、昨年は何とか達成できたと考えて

いますし、今年も達成できる底力が愛生園職員にはあると信じ、そして期待しています。

また、昨年一月には、愛生園介護員が中心となって、一昨年はコロナ禍で中止となった全国ハルセン病療養所介護員研修（その研修目的は、国立ハルセン病療養所に勤務する介護員の役割と責任を再確認するとともに、業務遂行上必要な知識、技術、態度の向上を図る）が、入所者を支える介護をグループワークのテーマとして、オンラインで二年ぶりに行われ、当園は介護員としての姿勢と模範を全国に示すことができたこと誇らしく感じました。二年前の当園での介護員研修では、閉講式のあいさつは「明日から普段の業務に戻りましょう。皆さんの帰りを入所者が心待ちにしています。」で締めくくりましたが、今回の研修は「次回からは、国立ハルセン病療養所介護員研修ではなく、国立ハルセン病療養所介護員の入所者に対する思いを実現するための研修が必要ではと感じた。」と締めくくりで賛辞を送るほど各

療養所介護員の入所者に対する思いは素晴らしく、入所者の皆さんにも聞いていただきたい程でした。

愛生園自慢の介護員が厚生労働省にも高評価で、今年も開催できるようであれば、是非とも実際に愛生園を訪れてもらい、ハンセン病療養所で一番入所者に近い存在で、療養所の真の主役である介護員の在り様を、ここ長島で体感して欲しいと考えています。愛生園入所者の皆さんは、すでにお気付きで実感しておられると思いますが、愛生園介護員には、全国のハンセン病療養所の模範となる働きができており、さらに上達できる素質も有しておりますので、期待していただきたいですし、さらには、介護員だけではなく、他の職員も底力も信じていただき、職員ひとりひとりの成長のためにも、引き続き温かい目で見守っていただきたいと考えています。

引き続き愛生園では、入所者のQOLを重視する、「一番大切なことは、単に生きることではな

く、善く生きることである」とのソクラテスの言葉どおりに、入所者の希望に沿って、が最善と考えつつも、それが叶えられない、医療安全上のリスクや、職員数等の物理的に不可能な現実があることも認識しながら、一定のルール下で、入所者も職員も不平等にならないように臨機応変に対応していきたいと考えています。愛生園としては、与えられた定員数で、心を込めて、実直に、精一杯の事で、入所者に寄り添うのみと考えています。

次に、コロナ禍でハンセン病の歴史が繰り返され、ハンセン病患者が憂いている現状があるからこそ、私としては、敢えて啓発活動にも力を注ぎたいと考えています。入所者の精神的健康を調和のとれた状態に保つのも、愛生園責任者の責務とも考えるからです。歴史的建造物の保存については、昨年、保存検討ワーキンググループで残す目的について以下の如く明記しました。

国民のハンセン病に対する偏見差別や誹謗中傷の物証である国立療養所長島愛生園をシンボリックな存在とし、過去の教訓として後世に伝え残す目的は、現在と将来の日本社会がこの地でハンセン病の歴史を知ることと病気による偏見差別や誹謗中傷を少しでも抑制するためであり、同時に私たち一人ひとりが長島愛生園歴代入所者約七〇〇〇人の「同じような思いを決して繰り返して欲しくない」という切実な願いを忘れないよう、この場で誓うためである。背景としまして、

二〇二〇年から日本国内で感染拡大し、いまだ終息の兆しを見せない新型コロナウイルス感染症は偏見差別や誹謗中傷、そして風評被害を生み出し、医療、経済、倫理をはじめとするあらゆる面で非常に由々しい事態を生み出している。ハンセン病の歴史を九〇年にわたり刻む国立療養所長島愛生園としては、ハンセン病の反省が全く活かされていまいと言わざるを得ない。人類の歴史は感染症の歴史でもあり、隔離施設が設けられた例も

あるがコレラ、結核、HIVなど偏見差別や誹謗中傷を生み出した歴史が大規模な場所として残っている例はほとんどない。将来的に幾度も被り得るこのような事態を回避すべく、今回の新型コロナウイルス感染症の教訓として長島愛生園の歴史的建造物等を後世に残すことで、長島愛生園はコロナ後の日本社会共有の教育資源としての側面をこれまで以上に高め、偏見差別や誹謗中傷を生まない日本社会の実現に寄与できる。

この意義に沿って歴史的建造物を残し、教訓として後世に伝えていこうと考えています。私個人の啓発活動に関して言及すれば、三年前から私の後輩である岡山大学医学部医学科の学生に講義を行っているのですが、来年度からは公衆衛生学（神田教授）の学外実習のひとつに選ばれ、医学科四年生二〇名前後が愛生園の見学実習を行うこととなりました。これに伴い、私は岡山大学医学部臨床教授の称号をいただき、非常に名誉なことと考えています。また、川崎医科大学四年生の見学も引

き続き受けており、来年度からは午後半日から全日となる予定です。『時かぬ種は生えぬ』のことわざのとおり、いずれ医師確保に繋がると信じています。最近の私の口癖ですが、原爆ドームを訪れ、「繰り返しませせん」と誓えると同様に、国民皆がハンセン病療養所を訪れ、病気による偏見差別や誹謗中傷を繰り返し返さないと誓う事が、いかなる差別も生じない寛容な社会の構築に大いに寄与し、同時に納骨堂に眠るハンセン病患者・元患者の慰霊にもなると考えています。

今年も、私をはじめ職員皆が真摯に任務を全うする所存ですので、引き続きよろしくお願い致します。

以下を追記させていただきます。昨年一月下旬にオミクロン株が国内で初確認され、飛行機に同乗していた七〇人全員を濃厚接触者とした際に、政府は健康状態や所在の確認に応じない場合は名前

想像できる現状があり、かつてのハンセン病の時代と同じで進歩がなく、同時にこれは、いじめが深刻化する社会構造とも言えます。さらに、新型コロナウイルス感染症の潜伏期間は一〜四日ですが、ハンセン病のそれは、ライ菌の増殖速度が遅く、平均五年、最長で二〇年との報告もあります。

潜伏期間中隔離して本当に良いのですか？

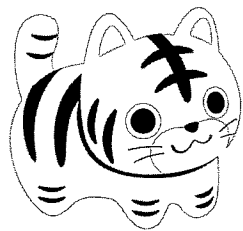
国民に監視させるのではなく、法規制するのが民主主義による平和国家ではないのですか？

将来の日本のためにハンセン病の歴史を活かしたいとの思いが私の中で増してきています。

参考までに、昨年一月上旬までの国内の新型コロナウイルス感染症の死亡率は一・一％。昭和五〇年厚生省編集・発行の国立療養所史によると、ハンセン病療養所内での入所者死亡率は一九一〇年代は一〇〜一五％、一九二〇年代は六〜九％、一九三〇年代も六〜八％、治癒可能と

を公表するようになりました。これが抑止効果となる社会は住みづらく、寛容な社会ではないと思うし、この決定を何か変だと思わない社会では、ハンセン病の歴史を繰り返し返してしまうのではと危惧します。濃厚接触者は感染者ではなく接触者に過ぎず、ハンセン病の歴史で例えると未感染児童であり、昨年ネットオークションにかけられ問題となった「癩病患者並血統家系調」に記載された、感染していない患者家族です。これは、日本特有の、日本でしか通用しない抑止効果を狙った手段であり、監視を国民にお願いし、自らは手を汚さないという、ある意味巧妙な手段に思えます。特措法や感染症法などの法律では規制できない濃厚接触者の行動を、その名前を公表することで、国民に監視させ制限させる行為は、かつてハンセン病患者をあぶり出すために、住民に協力を要請した無らい県運動に相通ずる様に思えてならないのです。そして、濃厚接触者をかばえば、かばった人にもきつと誹謗中傷の声があることが容易に

なった一九五〇〜六〇年代でも一・三〜一・九％で、コロナ感染症と比較し常時高い。死亡率のみで判断すると、ハンセン病はコロナウイルス感染症よりも、相当怖い病気であったと言えます。



（あいさつ）



長島愛生園副園長 吉川 雅文

私が愛生園に転勤してきたのが、今からちょうど一〇年前の一月一日でしたので、今年から愛生園一一年目になるという節目の日に副園長に就任させていただきました。

私は岡山の生まれですが愛生園に来た一〇年前は、恥ずかしながらハンセン病の知識もなく歴史もほとんど知りませんでした。転勤後の一〇年間で勉強し少しずついろいろなことがわかるようになってきました。また、多くの入所者さんや職員とも顔なじみとなり、お陰様で穏やかな毎日を過ごさせていただいています。今後ともどうぞよろしく願います。

みなさん、こんにちわ。

一月一日から、長島愛生園の副園長を拝命致しました外科の吉川です。

山本園長が、長期間、副園長不在の中で、多くの問題に対し一人で悩んでいる姿を近くで見ている、少しでも園長の力になりたいという思いで副園長になる決断をしました。これからも、微力ながら山本園長を支えて、愛生園の診療や運営に励んでいきたいと思っています。

私は常々、人はみな何らかの使命をもってこの世に生まれてきたと思っています。大げさなことを言うようですが、私がここ愛生園に来たことも神様から何かの使命を与えられて来たのではないかと思っています。それが何であるかをずっと考えてきましたが、最近なんとなく自分の使命ではないかと思えるもののはっきりしてきました。

一つは、ハンセン病という病気になったために、これまでたくさんの方の苦勞をしてこられた入所者さんたちに、人生の最終段階を迎えるにあたり、「これまでいろんなことがあったけど、ここに来て本当によかった。幸せな人生だった。」と言ってもらえるような場所にしていくことです。

もう一つは、日本の歴史の中に愛生園というところがあつて、ハンセン病という悲しい病気をこの日本からなくすために、これまで必死に努力してきた多くの人がいたのだということ、世の中に知ってもらおうということです。

つまりハンセン病撲滅のために生涯をかけて尽力した初代園長の光田健輔先生、また志半ばで亡くなられた小川正子先生、そのほかにもここ愛生園で入所者さんのために地道に働いてきた多くの職員たちがいたことを世の中の人に知ってもらいたいのです。

私は昨年、内科の山本洋先生に誘われて、小川正子先生の生まれ育った山梨県春日居町にある小川正子記念館に行き、お墓参りもさせていただきました。今年には小川正子先生の生誕一二〇周年になります。

夫と妻が親とその子が生きわかる 悲しき病世になからしめ

この歌を詠まれた小川正子先生は本当に心優し

い人でハンセン病というつらく悲しい病気をこの世の中からなくしたいという強い思いで、その短い生涯の中でハンセン病の撲滅に精一杯取り組まれました。先生はこの悲しい病気を世の中からなくさなければならぬという使命感と、家族を永遠に引き裂くことになるかもしれないという自責の念とはさまで葛藤しながら、苦しみと悲しみの中で患者さんたちに愛生園への入園を勧めていたのではないかと思います。当時、ハンセン病は、天刑病あるいは業病と言われ社会の中では忌み嫌われる病気で、この病を患えば本人だけでなくその家族までも社会から追いやられる悲しい時代でした。しかし、当時は確立した治療法もなく、隔離することでしたか冷たい社会から本人と家族を守る方法はなかったんだと推察します。

からこそ出逢えた先輩や友人、伴侶がいたこと、また愛生園に来たからこそ出合えた芸術や趣味も確かにここには在ったんだということを世間の人たちにもぜひ知ってほしいと強く思っています。職員のみなさんとはこれまで通り仲良く、気軽に話ができれば、いつでも声をかけてください。相談があれば、いつでも声をかけてください。昨年四月からはじめた「グッドジョブ賞」も、職員同士がお互いに褒め合える職場の雰囲気を作りたいたいという思いではじめました。「コツコツと努力している人や良いことをした人」を認めて、活気のある職場になればいいと思っています。開始当初は多くの投書をいただきましたが、残念なことに徐々に投書数が減ってきています。小さなことでもいいので、人知れず頑張っている職員がいたら、勇気をもってぜひ最寄りの投書箱に投書してください。よろしくお願いします。最後にになりましたが、私を副園長に推薦して下さった山本園長に深く感謝します。

## 俳句

### 露之芽会

#### 谷本眉静

侘助の窓に頓死の骨ひるふ  
かまきりの想い遂げたる雄喰らう  
しぶ抜き柿呉れる人冬温し  
九十を生きて頓死や冬の雷  
初時雨小紋の似合ふいとまごい  
残る虫想い出までえ形見分け  
柗の花回向へ変はる僧の声